

外国語教育メディア学会中部支部  
外国語教育基礎研究部会 第二回年次例会  
第一回卒論修論発表会

# 発表プログラム・予稿集



日時：2015年2月21日（土）（13:00～18:00）  
場所：名古屋大学東山キャンパス文系総合館  
主催：外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会  
Twitter ハッシュタグ：[#kisoken2014](https://twitter.com/kisoken2014)

お問い合わせ先：

外国語教育メディア学会中部支部  
外国語教育基礎研究部会事務局  
川口勇作（名古屋大学大学院生）  
y.kawaguchi@nagoya-u.jp

---

## 第二回年次例会に寄せて

外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会長 福田 純也

余寒厳しき折柄、この度は外国語教育メディア学会中部支部外国語教育基礎研究部会(基礎研)の催しに足を運んでいただき、まことにありがとうございます。

わたしども基礎研は、2013 年度に外国語教育メディア学会中部支部所属の研究部会として発足いたしましたので、今年で二年目、ということになります。部会長であるわたし自身を含め、運営に携わるものはみな、大学院生です。そのような事情ですので、なかなか組織の運営というのは、容易にいくわけではありません。それでもなんとか、毎週、週例会と称した勉強会をおこない、年に一度はこのような規模の研究例会を催し、そして、年度ごとの報告論集を発行できるのは、わたくしどもの研究部会を支えてくださる、皆々さまのお力添えにほかなりません。ここで、研究部会を代表いたしまして、厚く御礼申し上げたいと思います。

思いおこせば、昨年度の年次例会は、50 人を超す方々においでいただき、大変な盛会となりました。ご講演やワークショップを賜りました、水本篤先生、亙理陽一先生、そして前田啓朗先生は、わたくしどもの失礼な講師のお願いに対して、ご快諾くださいました。わたくしは部会長として、この研究部会の火を消さず、むしろ盛り上げていくことで、なんとか先生方のご厚意へ報いることができた、と思っておりました。しかし、残念ながら、前田先生は、昨年 10 月に、ご急逝なさいました。昨年、前田啓朗先生は、若手が多いこの研究部会で、我々へのエールとも取れるような、非常に示唆に富むお話をしていただきました。我々へ向けられた前田先生の、あの温かい眼差しは忘れようもありません。そしてちょうど今日、昨年よりは力強くなったわたしどもの部会を、どうしても見ていただきたかったのです。先生のことですから、またひょっこり、ここにあらわれてくださるのでは、といまだに思ってしまう。心から、前田啓朗先生のご冥福をお祈り申し上げます。

さて、今年度の例会は、昨年のもとはまた少し異なります。今年度には、昨年度を越す発表申し込みがございます(卒論修論:4 件、一般発表:9 件)。また、卒論・修論を独自の発表枠として設け、さらに会場にいらっしゃるみなさまから投票をいただき、特に優れた発表に対して、優秀発表賞を授与することになりました。また、リアリーイングリッシュ株式会社様より、ご厚意で開催にかかわるご援助を頂戴しております。もちろん、基礎研の年次例会は、豪華な基調講演こそがその醍醐味です。今年度は住政二郎先生より、ご自身の最新のご研究についてお話をいただきます。

まだまだ二年目の基礎研ですが、これからも若々しい精神で、さまざまなことに挑戦していきたいと思っています。過密なプログラムで大変失礼いたしますが、必ずや満足していただける会になると思います。この会の熱気が、余寒を追いやり、そして、私たちの思いが、届いてほしいところまで届きますように。

## 日程

- 12:00～ **会場受付**(文系総合館 7階)
- 13:00～13:05 **開会式**(7階カンファレンスホール)  
司会 田村 祐(名古屋大学大学院生)  
主催者挨拶 福田 純也(名古屋大学大学院生・日本学術振興会)
- 13:05～15:05 **卒論修論発表会**(7階カンファレンスホール, p. 6)  
13:05～13:35 発表 1(卒業論文, p. 7)  
発表者 原 和久(静岡大学学生)  
**TOEIC リーディングセクションにおける読解力測定の妥当性**
- 13:35～14:05 発表 2(修士論文, p. 8)  
発表者 熊崎 美世(名古屋大学大学院生)  
**第二外国語としてのフランス語の綴りと発音に関する e-learning 教材の開発とその効果:帰納的学習と演繹的学習の比較**
- 14:05～14:35 発表 3(修士論文, p. 9)  
発表者 栗田 朱莉(名古屋大学大学院生)  
**中学校英語学習者における読解構成技能のプロファイリング:音韻認識・デコーディング・語彙サイズに焦点を当てて**
- 14:35～15:05 発表 4(修士論文, p. 10)  
発表者 中島 敬之(京都大学大学院生)  
壇辻 正剛(京都大学)  
**外国語教育における e-ラーニングに関する一考察**
- 15:10～ 16:40 **一般研究発表**(p. 11)
- 第一室 (7階カンファレンスホール)**
- 15:10～15:40 発表 1(実証研究, p. 12)  
発表者 後藤 亜希(名古屋大学大学院生)  
**日本人英語学習者の音声言語の文処理におけるプロソディの影響:予備実験と今後の課題**
- 15:40～16:10 発表 2(実証研究, p. 13)  
発表者 福田 純也(名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)  
**注意の量と焦点はどちらがより言語発達を予測するか**

16:10～16:40 発表 3(実証研究, p. 14)

発表者 川口 勇作(名古屋大学大学院生)

コンピュータ支援語学学習態度に性差は影響するか:多母集団の同時  
分析を用いて

### 第二室 (7階ファカルティラウンジ)

15:10～15:40 発表 1(実証研究, p. 15)

発表者 石井 雄隆(早稲田大学大学院生)

近藤 悠介(早稲田大学)

文法的誤りの頻度情報を用いた英語学習者のライティング評価の予測

15:40～16:10 発表 2(実証研究, p. 16)

発表者 田村 祐(名古屋大学大学院生)

可算性の曖昧さは数の一致の誤りを誘発しやすいか:学習者コーパスを  
用いた予備的調査

### 第三室 (7階705室)

15:40～16:10 発表 2(実践報告, p. 17)

発表者 **Emiko HIDA** -Graduate School, Nagoya University

**Efficacy of Processing Level in Vocabulary Acquisition: The Relation  
between Context and Vocabulary Depth**

16:10～16:40 発表 3(実証研究, p. 18)

発表者 山田 慶太(名古屋市立守山東中学校)

中学校段階におけるスピーチ指導のあり方:協同学習とプロセスライティ  
ングに着目して

### 第四室 (6階623室)

15:40～16:10 発表 2(テクニカルレポート, p. 19)

発表者 草薙 邦広(名古屋大学大学院生・日本学術振興会特別研究員)

外国語教育研究におけるメタ知識基準の応用可能性:明示的および暗  
示的知識を測定するために

16:10～16:40 発表 3(テクニカルレポート, p. 20)

発表者 石井 卓己(筑波大学大学院生)

テキスト分析のブラックボックス化を防ぐために:英文解析プログラムと学  
習者コーパスを例に

16:45～17:45 **基調講演**(7階カンファレンスホール)  
講師提供:リアリーイングリッシュ株式会社様  
(<http://www.reallyenglish.co.jp/>)

**講師:住 政二郎(流通科学大学)**

**CALL 研究を考える:ひと・もの・ことの視点から**

**本**発表は3つのパートからなる。最初に, CALL 研究を「ひと・もの・こと」の3点から捉え直すエコロジカル・パースペクティブについて紹介する。次に, その具体例として, 発表者が現在取り組んでいる, 多段階反応モデルを活用した学習支援システムの開発と実践への応用について紹介する。多段階反応モデルとは, 多値データを取り扱うために, 2パラメーターロジスティックモデルを拡張したものである。一般的なCATは, 習熟度に応じて適切な項目を受験者に提示することができる。しかし, 回答が誤答であった場合, なぜ誤答であったのかという情報を受験者に提示することができず, 受験者は学習を深めることができない。そこで, 多段階反応モデルを活用し, 項目応答理論の原理を足場掛けの仕組みとして応用することで, 受験者の習熟度に応じて適切な問題項目とヒントを提示するシステムの開発に取り組んでいる。発表の最後には, 院生を中心とするこの部会の参加者に考えてもらいたい話題についても触れる。

17:45～17:50 **閉会式**(7階カンファレンスホール)  
司会 田村 祐(名古屋大学大学院生)  
卒論修論優秀発表賞発表  
主催者挨拶 福田 純也(名古屋大学大学院生・日本学術振興会)

18:00～20:00 **懇親会**(6階ファカルティラウンジ)

## 一般研究発表 発表早見表

	第一室 (CH) 実証研究	第二室 (FL) 実証研究	第三室 (705) 実践報告	第四室 (623) テクニカル
1. 15:10	後藤 文理解とプロソディ	石井 (雄)・近藤 テキストの文法的誤り		
2. 15:40	福田 注意の量と焦点	田村 名詞の可算性と数の誤り	HIDA Processing levels	草薙 メタ知識基準
3. 16:10	川口 CALL 態度の性差		山田 中学校の協同学習	石井 (卓) ブラックボックス

## 事務局から

### 本日のお食事について

本日は、会場である文系総合館から歩いて5分ほどにございます南部食堂1階 Mei-Dining が、11時から14時まで営業しております。また、学内外でコンビニ(ファミリーマート)も営業しております。

### 懇親会について

本日の例会終了後、18時より、6階ファカルティラウンジにおいて懇親会を開催いたします(参加費:1,500円)。質疑の続きを行う場、関連分野の先生がたとの交流の場として、ふるってご参加ください。

### 週例会について

毎週1回、週例会と称して勉強会を開催しており、研究の発表や文献の輪読を行っております。今年度は、毎週木曜18時15分より、名古屋大学にて開催されております。どなたでもご参加いただけますので、関心のある方はお気軽にお問い合わせください。

### 基礎研 研究相談フォーラムについて

基礎研では、外国語教育研究についての質問や相談を行う場として、「基礎研 研究相談フォーラム」を運営しております。研究内容や研究方法についてお悩みの方は、どなたでも投稿頂けます。ぜひご利用ください。 [http://9326.teacup.com/kisoken\\_forum/bbs/t1/150](http://9326.teacup.com/kisoken_forum/bbs/t1/150)

### 外国語教育基礎研究部会 報告論集について

基礎研では、年に一回、オンライン上で報告論集を発行しています。今年度も投稿のお申し込みを受け付けます。投稿に関する詳細は当部会のサイトで告知させていただきます。投稿昨年度の報告論集は <http://goo.gl/RZJm2W> にて公開しております。

# 卒論修論発表

予稿

# TOEICリーディングセクションにおける読解力測定の妥当性

原 和久

静岡大学学生

**Keywords:** TOEIC, リーディング, 妥当性

## 1. はじめに

今日の日本では、TOEIC テストが個人の英語能力を表す代表的な指標のひとつとみなされることがある。また、TOEIC の公式ホームページには、TOEIC はリーディングとリスニングといった受容的側面の言語能力を測定することで、算出的側面であるスピーキングやライティングの能力をも測定できると記載されている (ETS, n.d.)。主に、大学生の就職活動の際に TOEIC のスコアがどれだけの英語能力を持ち合わせているのかの基準とされる場合があるが、TOEIC テストが受験者の英語能力を適切に測定しているのかについては、疑問が残る。そこで、本研究では TOEIC のリーディングセクションにおける基準関連妥当性を読解力、語彙知識、そして和文英訳力との相関関係から検証した。

## 2. 実験方法

第二言語として英語を少なくとも 8 年間学んでいる日本人大学生 1 年生から 4 年生を対象に、読解力、語彙知識、和文英訳力を測定する実験を実施した。読解力テストには TOEIC の類似問題から、リーディングセクションにおける part7, double passage 形式の問題を、語彙テストには望月語彙サイズテスト (望月, 1998) を、和文英訳テストには英検準 1 級の類似問題から抜粋した。読解力テストでは、小問が 5 つ含まれた大問を 2 つ、語彙テストでは、語彙サイズ 2000~6000 語の問題から各サイズ 6 問、和文英訳テストでは 3 問出題し、それぞれ 30, 10, 6 点を満点とした。これらの得点に対して記述統計および相関係数行列をもとめた。なお、実験参加者がもつ直近の TOEIC スコアが  $M = 487.45$ ,  $SD = 72.18$  であった。

## 3. 実験結果

大学生 29 人の実験結果から、語彙テストでは  $M = 19.48$ ,  $SD = 3.81$ ,  $\alpha = .77$ , 読解テストでは  $M = 4.14$ ,  $SD = 2.01$ ,  $\alpha = .79$ , 和文英訳テストでは  $M = 3.31$ ,  $SD = 1.51$ ,  $\alpha = .83$  という値が測定された。またこれら 3 つのうち 2 つの相関関係を見たところ、語彙テストと読解テストが  $r = .15$ , 読解テストと和文英訳テストが  $r = .08$ , 和文英訳テストと語彙テストが  $r = .38$  という結果となった。

先行研究では L2 の読解力は語彙知識や文法知識などと大きな相関関係があるとされているにもかかわらず、結果として本研究では語彙知識、読解力、和文英訳力の間あまり大きな相関関係が見られなかったことから、TOEIC のリーディングセクションの得点は語彙知識あるいは和文英訳の能力以外の他の要素が大きく関係しているのではないかと考察した。



## 第二外国語としてのフランス語の綴りと発音に関する

### e-learning 教材の開発とその効果

#### —帰納的学習と演繹的学習の比較—

熊崎 美世

名古屋大学大学院生

**Keywords:** フランス語, e-learning, 帰納的・演繹的学習

#### 1. はじめに

本研究の目的は、フランス語の綴りの読み方をどのような方法で学ぶことで、フランス語の学習経験が全くない日本語母語話者は学習効果を得ることができ、また、その効果はどのようなもので、さらにそれを持続させることはできるかを検証することである。高等教育機関において行われているフランス語の授業では、発音に関する指導はほとんど行われていないという現状や、読み方を学ぶことに特化したフランス語のマルチメディア教材が管見の限りないという点などから、本研究では、フランス語の学習経験のない日本語母語話者を対象とした、フランス語の綴りと発音の関係を学ぶための e-learning 教材を開発し、それによる学習効果を様々な要因から検証した。

#### 2. 本実験

24名の大学生及び大学院生が本実験に参加した。作成した教材は、帰納的学習法と演繹的学習法の2つの学習法を1つにまとめ、さらにその提示の順序を入れ替えた計2種類のものであった。それら2種類の教材を、それぞれ半分にあたる12名ずつ、実験参加の順に交互に割り当て、ランダムに分けた。実験ではその教材の学習効果を測るため、事前と事後、遅延テストを行い、既習語と未知語とに分けて、学習方法（提示方法）、時間軸及び項目間の違いを比較した。また、教材に関する教育的示唆を得るために、本研究が開発した教材を使用した学習者がどのような感想を持つかアンケート調査を実施した。

#### 3. 結果と考察

本研究においては、教材による学習効果が少なからず得られたが、学習方法（提示方法）による差異は見受けられず、項目による差異が大きかったこと、学習した内容は未知語へも応用することができるということがわかった。また、アンケート調査により、実験へ参加したことでフランス語に興味を持つようになったことや、本研究で開発した教材に対して肯定的な評価がなされていたこと等がわかった。以上により、フランス語の綴りと発音を学習することには、意義があると考えられる。

# 中学校英語学習者における読解構成技能のプロファイリング

## —音韻認識・デコーディング・語彙サイズに焦点を当てて—

栗田 朱莉

名古屋大学大学院生

**Keywords:** 音韻認識, デコーディング, 語彙サイズ

### 1. はじめに

これまでの英語を第一言語 (L1) とする話者を対象にした先行研究では、音韻認識は英語のデコーディング能力や読解能力との関連が強いということが明らかになっている。しかしながら、どのレベルの音韻認識が必要かということについては、議論が分かれる。英語を L1 とする未就学児から小学生までを対象とした研究では、少なくとも音素レベルでの音韻認識はデコーディング及び読解との関連が示されているが、音節やオンセット・ライムレベルの音韻認識においては、研究によって異なる結果が示されている。また、第二言語においてはこれまで高熟達度の学習者を対象とした研究はあるものの、初期の学習者を対象とした研究は限られている。

### 2. 本調査

本研究では初期の日本人英語学習者 (中学生 29 名) を対象に、日本語と英語で必要な音節・モーラ・音素レベルの音韻認識、デコーディング (単語認識 [実在語; 既習語彙], コードブレーキング [非実在語]) および語彙知識を測る課題を実施し、学習者の持つそれらの特徴を探索的に調査した。それぞれの課題の成績を用いて混合分布モデルによる分析を行い、ベイズ情報量基準の値が最も高かった3つの構成要素から成るモデルを選択した。このモデルに基づき学習者を3つのグループに分類し、その特徴を記述することで学習者の読解構成技能に関するプロファイリングを行った。

### 3. 結果と考察

結果として、どのグループにおいてもモーラレベルの音韻認識は高かったが、音節・音素レベルの音韻認識において違いが見られた。音節・音素レベルともに音韻認識が高いグループは、デコーディング能力が高く、語彙サイズも大きかった。一方で、音素レベルの音韻認識のみが他のグループと比較して著しく低いグループは、デコーディング課題と語彙サイズも著しく低い成績を示した。このことから、音素レベルの音韻認識の低さと、デコーディングや語彙の習得困難性が結びついている可能性が示唆された。発表の際は、この結果に基づき、読解構成技能を用いたプロファイリングの有用性、および読解指導に向けて考え得る教育的示唆を考察する。

## 外国語教育におけるe-ラーニング利用に関する一考察

中島 敬之

京都大学大学院生

壇辻 正剛

京都大学

**Keywords:** e-ラーニング, Kinect, アンケート調査

### 1. はじめに

本論文では、ICT技術の発展とともにe-ラーニングが普及していく現状を捉え、現在普及しているe-ラーニングの問題点を探る。e-ラーニングに関しての調査において不十分な点を考察し、e-ラーニングに関する調査不足である現状を指摘した。特に京都大学内における今後の大学におけるe-ラーニングの在り方を模索するために、アンケート調査を学生・教員双方に対して行い、e-ラーニングに対しての意見の齟齬などを中心に観察を行う。

### 2. e-ラーニングについて

現在日本で一般的だと思われるe-ラーニングの具体例を挙げ、概観する。特にCALL, OCW, MOOCs, LMSについて概要と外国語教育における利用例などについて述べ、e-ラーニングの広がりについての現状を捉える。

### 3. ヒューマンセンシング技術を利用したe-ラーニング教育応用の検討

現状のe-ラーニングでは学習者の学習状態を詳細に記録することやリアルタイムに教育支援を行うことに限界がある。それらの解決策の1つとしてヒューマンセンシング技術を利用し、学習者の学習状態を興味度や集中度などの観点から記録することで解決を測る。そこで、Kinectを利用し学習者の内部状態の記録を試み、今後のヒューマンセンシング技術を利用した外国語教育の可能性について検討を行った。

### 4. アンケート調査

学生と教員双方にアンケート調査を行う有用性を踏まえ、京都大学において外国語科目を担当している教員に対してアンケート調査を行った。結果として学生側はe-ラーニングにおける学習に関して自律性を求める声は強く、教員からは教員の負担を減少させるe-ラーニングの在り方を求められる結果となった。

一般研究発表

予稿

# 日本人英語学習者の音声言語の文処理におけるプロソディの影響

## —予備実験と今後の課題—

後藤 亜希

名古屋大学大学院生

**Keywords:** 聴解, プロソディ, 文処理

### 1. 研究背景

音の継続時間, 音の強さ, ピッチの変化といったプロソディによって, 聞き手は発話された文の焦点や, 話し手の意思, 統語構造を把握するといわれている。第一言語においては, 曖昧性の解消は, 音声言語受容の早い段階で行われることが示されてきた (Snedeker & Trueswell, 2002)。また, 第二言語を対象とした研究では, 聞き手はプロソディを用いて統語構造の把握をおこなっていることが示唆されてきた。一方で, 聞き手がプロソディだけでなく意味情報も用いて統語構造を把握している可能性が指摘されており (Nakamura, 2012), プロソディのみの影響を測定するための手法を用いる必要があるといえる。

### 2. 予備実験

文構造の違いにより, 学習者の統語構造の把握のためのプロソディの使用には差がみられるかを明らかにすることを, 研究課題とする。プロソディのみの影響を測定するため, 統語的一時曖昧文の一部を音声提示する手法を用いて, 日本語を第一言語とする英語学習者 ( $N=25$ ) を対象に予備実験を行った。統語的一時曖昧文として, 後期閉鎖節/早期閉鎖節文のペア ( $k=20$ ), プロソディにより主語が異なる文ペア ( $k=20$ ) を用いた。実験参加者には統語的一時曖昧文の一部が音声提示され, ペアのうちいずれの文が発話されているかを選択する課題を与えた。

### 3. 結果と今後の展望

実験の結果, 統語構造を把握するためのプロソディの影響は, 文構造によって異なり, また学習者はプロソディによって統語構造を予測することが明らかとなった。また, 学習者が, 音声受容の早い段階でプロソディを用いて, 後続する文の統語構造を予測している可能性が示唆された。発表では, 予備実験から得られた課題について議論する。

### 4. 参考文献

- Nakamura, C. (2012). The effect of prosodic boundary in understanding English sentences by Japanese EFL learners. *Second Language, 11*, 47–58.
- Snedeker, J., & Trueswell, J. (2002). Using prosody to avoid ambiguity: Effects of speaker awareness and referential context. *Journal of Memory and Language, 48*, 103–130.

## 注意の量と焦点はどちらがより言語発達を予測するか

福田 純也

名古屋大学大学院生  
日本学術振興会特別研究員

**Keywords:** 注意の量と焦点・言語発達・言語化

### 1. はじめに

注意は第二言語の習得において重要な役割を担い、注意がより向けられた文法的要素はより習得が促進されるといわれている（概観として、Robinson, 2003）。先行研究ではその注意の「量（注意を向けたと考えられる回数など）」を取り扱ったものと「焦点（全体的な注意シフトにおける特定の側面に注意が向けられた割合）」を取り扱ったものがあるが、研究においてそのどちらかを取り扱う積極的な理由を論じているものはほとんどなく、概観の際においてもそれらは同様のものとして扱われている。本研究は、その注意の「量」と「焦点」のどちらがより言語発達に寄与するかを示唆するべく調査を行った。

### 2. 本研究

16人の大学生が実験に参加した。参加者はエッセイライティングを行い、参加者自身に自由にそのエッセイを推敲してもらった。その際、修正を行った部分に対してなぜその修正を行ったのかに関して全ての箇所と言語化（*languageing*）を求めた。その後、同じトピックで再度エッセイライティングを行った。分析に際し、文法的な部分に言及した回数を「文法に対する注意の量」、すべての言及に対する文法的な言及の割合を「文法に対する注意の焦点」とし、数量化を行った。また産出データに関しては、統語的複雑さ（*words per sentence*）と正確さ（*errors per sentence*）を計上した。

### 3. 結果と考察

それぞれの指標値に対してピアソンの積率相関係数を求めたところ、注意の「焦点」に関しては統語的複雑さ、正確さ双方との間に極めて低い相関しかみられなかった。一方、注意の「量」に関しては、正確さにおいては低い相関係数を示したものの、複雑さとは中程度の相関を示した。また統語的複雑さにおいて、注意の量を独立変数としたブートストラップ法による回帰分析を行い、回帰係数の95%信頼区間を求めたところ、その区間は[.001, .289]であった。以上の結果は、注意の量は統語的複雑さを予測するが、注意の焦点にはその予測力がない可能性を示唆している。

### 引用文献

Robinson, P. J. (2003). Attention and memory during SLA. In C. Doughty & M. Long (Eds.), *Handbook of Second Language Acquisition* (pp. 631–678). Oxford: Blackwell.

# コンピュータ支援語学学習態度に性差は影響するか

## —多母集団の同時分析を用いて—

川口 勇作

名古屋大学大学院生

**Keywords:** コンピュータ支援語学学習態度, 性差, 多母集団の同時分析

### 1. はじめに

コンピュータ支援語学学習 (CALL) に関する先行研究や経験的事実に基づく言説において, CALL に対する態度に男女差が存在するという主張が散見される。本研究では, コンピュータ支援語学学習に対する学習者の態度を信頼性・妥当性をもって測定するために開発された「コンピュータ支援語学学習態度尺度 (以下 CALL 態度尺度)」(川口・草薙, 2014) を用いて, 性差が学習者の CALL 態度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究課題

本研究における研究課題は (a) 「CALL 態度尺度は男女において同様の因子構造を持つか」、(b) 「男女のコンピュータ支援語学学習態度に差異はみられるか」の2点である。

### 3. 調査

川口・草薙 (2014) と同一サンプルである中学・高校・大学生を対象としたデータを, 性別を要因として再分析した。男女の間で CALL 態度尺度の因子構造が再現されるか, また CALL 態度尺度の因子平均に差がみられるかを確認するため, 構造方程式モデリングを用いた多母集団の同時分析を用いた。

### 4. 結果と考察

検証的因子分析の結果, 男女のデータそれぞれにおいて, 望ましい水準の適合度が得られた。また多母集団の同時分析の結果, 男女において同様の因子構造が再現された。因子平均・分散・因子間相関の値を男女で比較した結果, CALL 態度の下位概念ごとに男女の間で差がみられ, またその差は下位概念ごとに異なる傾向を示した。これらの結果は, CALL 態度の有り様に性差が影響を及ぼす可能性を示唆するものであった。

### 参考文献

川口勇作・草薙邦広 (2014). 「新しいコンピュータ支援語学学習態度尺度作成の試み: 英語を学習する大学生を対象として」『外国語教育メディア学会 第54回全国研究大会 発表要項集』 84-85.

## 文法的誤りの頻度情報を用いた英語学習者のライティング評価の予測

石井 雄隆・近藤 悠介

早稲田大学大学院生・早稲田大学

**Keywords:** ライティング, 自動採点, 機械学習

### 1. はじめに

小島・石井・金田・磐崎・赤松・金澤 (2014) は, ライティング評価とテキストの言語的特徴の関係についてメタ分析を行っており, 文法的正確さの重要性について言及している。この示唆を踏まえ, 本研究では, 日本人英語学習者のライティングにエラータグが付与された Konan-JIEM Learner Corpus (Nagata, Whittaker & Sheinman, 2011: KJLC) を用い, 文法的誤りの頻度からライティング評価の予測を試みた。

### 2. 実験

KJLC は 10 個のトピックが含まれているが, 本研究では, 各トピックの文法的誤りの頻度をもとにクラスタリングし, この頻度の類似度が高い 5 つのトピックについて書かれたものを対象とした。基準変数は, 成田 (2013) において優れていると評価されたものを 1, そうでないものを 0 とした 2 値データを用いた。KJLC では 20 種類のエラータグが付与されているが, 本研究では, 成田による評価で平均値が大きく異なる 10 個のエラータグの頻度を開平変換し, 予測変数とした。標準ユークリッド距離を用いた近傍法を使用し, ライティング評価を予測した。評価データにおいて, 本予測方法を用いて算出した評価と成田による評価の  $\kappa$  係数は .57 であった。

### 3. おわりに

今回の結果から, 文法的誤りの頻度情報のみを用いても, 学習者のライティングは, 高い精度で予測できることが示唆された。さらに, 複雑さや流暢さに関する指標を予測変数に含めることにより, より精度の高い予測が期待できる。

### 参考文献

- 小島ますみ・石井卓巳・金田拓・磐崎弘貞・赤松信彦・金澤洋子 (2014). 「ライティング評価とテキストの言語的流暢性・複雑性・正確性との関係: メタ分析による過去の研究成果の統合」大学英語教育学会英語語彙研究会第 10 回研究大会.
- Nagata, R., Whittaker, E., & Sheinman, V. (2011). Creating a manually error-tagged and shallow-parsed learner corpus. In *Proceedings of the 49th Annual Meeting of the Association for Computational Linguistics*, 1210–1219.
- 成田真澄 (2013). 「Konan-JIEM 学習者コーパスにおける名詞後置修飾要素の分析」『東京国際大学論叢—言語コミュニケーション学部編』9, 1–12.



# 可算性の曖昧さは数の一致の誤りを誘発しやすいか

## —学習者コーパスを用いた予備的調査—

田村 祐

名古屋大学大学院生

**Keywords:** 可算性, 数の一致, 学習者コーパス

### 1. はじめに

本研究は、学習者コーパスのライティングデータを分析の対象とし、学習者が産出する名詞句内における数の一致の誤りに関する言語的要因を検討した。

### 2. 背景

名詞の可算性に関する知識は明示的知識としても習得が困難である (e.g., Tamura & Kusanagi, in press)。よって、名詞句の主要部として可算名詞と不可算名詞の両方をとることが可能な *some*, *all* が名詞句の指定部にある場合、*many*, *these*, *those* など、後ろに可算名詞のみを取る指定詞がある場合よりも多くの誤りが観察されるはずである。

### 3. 方法

上述の研究課題を調査するため、本研究は学習者コーパス NICE 2.2.1 を使用した。学習者のデータのうち、次のファイルは分析から除外した：(a) 監督者の立ち会いがない、(b) 同じ学習者が複数書いている、(c) 母語話者の添削がついていない、(d) TOEIC スコアの記載がない。最終的に対象となったのは 92 ファイルであった。

### 4. 結果

*some*, *all*, *many*, *these*, *those* を含む 2, 3, 4gram を抽出し、名詞句をチャンクとして処理していると判断できるものは分析から除外した。母語話者が添削した箇所を数の一致の誤りと判断し、数の一致の生起回数と誤りの発生回数を計算した。その結果、指定詞の違いによる誤用率の違いは見られなかった。しかし、名詞句の主要部から指定詞までの距離の影響や、名詞自体の可算性の影響がみられた。これらの傾向が読解などの受容的文処理課題や文法性判断課題などでもみられるのかといった点は、さらなる調査が必要である。

### 5. 参考文献

Tamura, Y. & Kusanagi, K. (in press). Asymmetrical representation in Japanese EFL learners' implicit and explicit knowledge about the countability of common/material nouns. *Annual Review of English Language Education in Japan*, 26.

## **Efficacy of Processing Level in Vocabulary Acquisition: The Relation between Context and Vocabulary Depth**

HIDA, Emiko

*Graduate Student, Nagoya University*

**Keywords:** processing level, context, vocabulary depth

### **1. Purpose**

The present study aims to discover how processing levels promote the vocabulary acquisition of Japanese high school students, and to explain how two different types of contexts (i.e., given context and generated context) deepen the vocabulary knowledge of the learners, by providing three different tasks for the participants, which aimed to assess both their receptive and productive vocabulary knowledge.

### **2. Method**

Fifty-nine students learning English completed one of the three vocabulary learning tasks that require different processing levels: list learning, context learning, and a writing task. While students in the context learning group received sentences with the target words (i.e., given context), the students in the writing task were asked to provide their original sentences relating to their personal experiences (i.e., generated context). These three tasks were all subjected to the same three post-tests: a sight test, a receptive test, and a productive test. Receptive and productive knowledge of the target words was assessed following the sight test two days after the treatments.

### **3. Results**

The retention performance in the writing task was the highest among the others; however, no significant difference between list and context learning in the receptive knowledge test was found, while that of list learning was higher than context learning in the productive knowledge test. Moreover, there were no significant differences among the results of the three learning tasks in the sight test.

### **4. Discussion**

The task of writing an original sentence, which was supposed to require the deepest processing was the most effective among the other tasks. Due to the unexpected results, more detailed analysis will be needed for further inquiry on the effects of different processing levels of list and context learning,

## 中学校段階におけるスピーチ指導のあり方 —協同学習とプロセスライティングに着目して—

山田 慶太

名古屋市立守山東中学校

**Keywords:** 協同学習, プロセスライティング, スピーキングの評価

### 1. はじめに

本実践は筆者が平成25年度公立中学校2年生3クラス120名の生徒を対象に行ったものである。タスクとして設定したのは”My Precious Moment”または”My Favorite Thing”をテーマとしたスピーチ発表である。スピーチ原稿作成から口頭発表までをプロジェクトとし、検定教科書を用いた指導と平行しながら1月～3月までの約3ヶ月間週4時間のうちの1時間を割り当て、継続的に取り組ませた。

### 2. 協同学習とプロセスライティング, 2つの手法の活用

生徒の英語運用能力を高める上で、既習の語彙や文法を駆使して、自分の所有物や経験を基にメッセージを考え聞き手に伝えるスピーチ活動は有効であると考えられる。しかし、生徒が伝えたい内容も、使おうとしている語彙や文法も個人によって様々である。そのため、1クラス40人という生徒たちにひとりの教師が効率よく指導することは容易ではない。そこで着目したのが、協同学習とプロセスライティングの手法である。このふたつの手法を原稿作成の段階に取り入れ、グループ内で教え合い、また互いの作成した原稿を読み合いながら、感想を伝え合い、可能な限り自分たちの力で「伝わる内容」に仕上げていく。

その後、完成した原稿に教師とAETが最終校正を入れて、生徒に返却し、教師が個々にリハーサル機会を与え、より良い口頭発表にするためのアドバイスをした。事前に提示した「アイコンタクト」、「流暢さ」、「スピード」、「内容」について評価基準を基に教師が評価し、全体へのフィードバックを与えた後に、振り返り活動に取り組ませた。

### 3. 結果と考察

スピーチ指導導入時よりも、アイコンタクトがメッセージを伝える上で大切であることを強調し、またリハーサルにおいても重視したこともあり、多くの生徒たちは自分たちのお気に入りや経験について、伝わる英語で、相手の目をしっかりと見ながら発表することができていた。振り返り活動においても、協同学習について肯定的な意見が多く見られた。メッセージの授受を重視しながら、1人の教師が多くの生徒を指導する上で、今回の実践は有効なものであると考える。

## 外国語教育研究におけるメタ知識基準の応用可能性

### —明示的および暗示的知識を測定するために—

草薙 邦広

名古屋大学大学院生  
日本学術振興会特別研究員

**Keywords:** 明示的・暗示的知識, メタ知識基準, 研究方法論

#### 1. はじめに

認知心理学における人工言語学習 (Artificial Grammar Learning ; AGL) の分野では, 無意識化における知識の創発 (無意識的学習) が重要な研究テーマである。近年の AGL 研究は, 無意識的学習の結果として得られる暗示的知識 (implicit knowledge) を測定するために, メタ知識基準 (metaknowledge criteria) とよばれる指標を頻繁に援用している。本発表では, このメタ知識基準についての手法上の検討をおこなうとともに, 実際の外国語教育研究データをもちいて, 当手法における外国語教育研究への応用可能性を探る。

#### 2. メタ知識基準

メタ知識基準とは, ある特定の知識が意識化されうる程度を示す。近年では, 課題成績 (判断課題における正答率など) と課題に対する主観的測度 (試行ごとの自信の程度など) の相関関係をその操作的定義とすることが多い。たとえば, 文法性判断課題で, 「正答率がチャンスレベル以上でありながら, 直感にもとづいて回答したと感じる程度」を指標化するもの, というようにとらえることができる。メタ知識基準は, 無相関基準 (zero-correlation criteria), 信号検出理論 (signal detection theory) による評価などといった, 非常に多様な計算法をもつ。しかしながら, このような指標の外国語教育研究における応用例は極めてすくない。

#### 3. 本発表の焦点

本発表では, まず, (a) 構造知識 (structural knowledge), (b) 判断知識 (judgment knowledge), (c) 当て推量基準 (guessing criteria), (d) メタ知識基準, (e) 信号検出理論といった AGL 研究における基本概念を概観する。その後, 外国語教育研究における実測データをもちいながら, メタ知識基準の計算法, (a) Chan の距離やそれに類似する式, (b) Type I  $d$ -prime と Type II  $d$ -prime, (c) 連関係数にもとづく式 ( $\chi^2$ ,  $\phi$  係数, クラメールの  $V$  係数, ユールの  $Q$  係数, テトラコリック相関係数), および (d) meta  $d$ -prime を紹介する。特に, テトラコリック相関係数の有用性と, Cochran-Mantel-Haenszel 法 (CMH) および調整変数分析 (moderator analysis) を援用することの重要性を主張する。

# テキスト分析のブラックボックス化を防ぐために

## —英文解析プログラムと学習者コーパスを例に—

石井 卓巳

筑波大学大学院生

**Keywords:** テキスト分析, 英文解析プログラム, 学習者コーパス

### 1. はじめに

本発表では、テキスト分析に利用される英文解析プログラムと学習者コーパスを例に、テキスト分析のブラックボックス化を論じると共に、そのブラックボックス化を防ぐ方法について提案や議論を行いたい。

### 2. 英文解析プログラムの利用

テキスト分析に用いられる従来の指標としては、テキストの (a) 流暢性 (e.g., 総語数), (b) 統語的複雑性 (e.g., 従属節や品詞句の頻度), (c) 語彙的複雑性・語彙の豊かさ (e.g., TTR や LFP), (d) 読みやすさ (e.g., Flesch-Kincaid Grade Level) に関するもの等が存在する。

しかし、これらの指標は全てテキストの表層的特徴に関するものであり、分析対象の文が全く意味をなさない場合や非文の場合でも、数値が算出される問題も指摘されている (染谷, 2009)。このような問題を解決するため、テキストの意味, 談話, 結束性, 一貫性等の側面にも焦点を当てるべきだとして、オンライン上で無償利用可能な英文解析プログラム Coh-Metrix が開発された (McNamara & Graesser, 2011)。また、ローカル環境で使用可能、かつ辞書ファイルをユーザーが自由に変更可能な SiNLP も公開されている (Crossley, Allen, Kyle, & McNamara, 2014)。

こうした英文解析プログラムは数多くの指標を簡易に算出できるため、近年、多くの研究で利用されている (水本, 2012)。しかしながら、その利用には細心の注意が必要であることを、各指標の算出過程や意味しているものを例に説明する。

### 3. 学習者コーパスのアップグレード

テキスト分析では、コーパスを分析対象とすることも多いが、コーパスの利用にも同様に注意が必要である。本発表では、一例として、日本人 EFL 学習者のエッセイを収集した学習者コーパスに焦点を当てる。

日本人 EFL 学習者コーパスとしては、JEFLL Corpus (投野, 2007), NICE (杉浦, 2011), ICNALE (Ishikawa, 2013) 等が存在する。これ等の学習者コーパスの内、ICNALE と NICE はバージョンアップを重ねており、その情報がそれぞれの公式サイトにも記載されている。

テキスト分析のブラックボックス化を防ぐためには、こうしたバージョンアップに伴う、学習者コーパスのアップグレードにも注意を払うべきであるということを、具体例と共に示す。更に、そこから、自作のコーパスを構築・利用する場合に考慮すべき点についても論じる。

# Nagoya.R #13

## 3月下旬開催予定

場所：名古屋大学東山キャンパス国際開発研究科棟

時間：13時開始（予定）

初心者・入門者大歓迎！

発表者絶賛募集中！Rに関することならなんでもOK！



参加・発表に関するお問い合わせはこちらまで-> 運営代表: 川口勇作 ([y.kawaguchi@nagoya-u.jp](mailto:y.kawaguchi@nagoya-u.jp))

Twitterにて最新情報随時更新中！（ハッシュタグ：#NagoyaR）

# Reallyenglish 2015年4月リリース! 「EZ to Talk」のご紹介



## 「EZ to Talk」のイメージ



eラーニング学習

+



スカイプ英会話レッスン

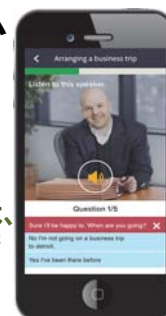
① 4技能試験に必要な 英語力の習得

② Input × Output の強化学習

## 「EZ to Talk」の特長

- ① インプット（自己学習）とアウトプット（英会話）との相乗効果
- ② レッスンの内容は、eラーニングに即した特別カリキュラム
- ③ 初級者から上級者まで、3段階のレベルに対応
- ④ 1回のレッスン時間は25分 ※24時間受講可能
- ⑤ 講師は、TESOL（英語教授法）有資格者

インプット部分は、  
スマートフォンで  
学習可能！



コース名	サービス概要	受講期間	本体価格
Ez to Talk（初級）	① Practical English 6 ② オンライン英会話レッスン （25分×24回）	3~6ヶ月	30,000円
Ez to Talk（中級）			
Ez to Talk（上級）			

お問い合わせ先  
リアリーイングリッシュ株式会社 学校営業部  
☎ 03-3238-1630  
✉ edu-japan@reallyenglish.com

# 外国語教育メディア学会（LET）中部支部 外国語教育基礎研究部会



外国語教育基礎研究部会では，外国語教育における基礎的な理論や研究法・統計手法を学んでいます。

週に一回勉強会（**週例会**）を開催し，文献の輪読などを通して研究についての知識の共有をはかっています。

その他にも今回のような年次例会や，研究者の方を招いた講演会なども開催しています。